

---

# 不幸で不幸な不幸人

黒黒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不幸で不幸な不幸人

### 【Nコード】

N9447P

### 【作者名】

黒黒

### 【あらすじ】

主人公はとにかく不幸。

不幸意外に何て言ったら良いか解らないほど不幸。

しかしその反面微妙な所で幸せ。

しかしやっぱり不幸。

そんな不幸になるために生まれたような主人公が不幸にも不幸な事に巻き込まれる不幸な物語。

大事な事なのでもう一度、不幸です。

もう一度言いましょう！不幸です。

不幸人は人じゃ有りません。  
(前書き)

主人公チートかも知れませんが。  
ヒロインは決まっていない。

不幸人は人じゃ有りません。

おつす、オラゴk・・・

違います。そんなスーパーパーな人じゃありません。

俺は普通の人、一般人、善良なる市民、だから今起きている状況はありえない。

どんな状況か？

ふふふふふふふ、それはね？

楽しい気分で旅行に来ていた俺・・・

道に迷って港の倉庫へ・・・

声が聞こえるんで見に行く・・・

そして・・・

「マフィアに追われとんじゃあああああ！？」

「居たぞ！こつちだ！！」

しかも追ってくる奴等も追ってくる奴等だ。

どんだけしつこいんだ！

俺は昔フランスで変な事件に巻き込まれて、現地の不良グループから逃げるために必死こいてパルクールってやつ教わったから逃げ足には自信があるってのに！

バキユツ！

・・・流石マフィアさんがた。チャカまで持ち出しちゃうんですか！？

「くつそ！やってやるよ！畜生！！」

俺は涙目で反転する。

行く先には強面のスーツの人たちが五人……

銃弾を打ち込んでくる。

しかし、俺はどう言う訳か銃を撃たれるのは意外と慣れてしまっている……

銃の直線状から少し身をずらし走っていく。

俺の脇腹を掠めていく銃弾……あぶねっ！

十分に近づき一人目の顎先を殴る。

一人目……

そのまま気を失って倒れようとする奴を腕を掴み背負い投げで投げつける。

二人目……

振り向きざまに鳩尾に左拳を入れ、その手を引き右足でもう一人の米神を蹴りぬく。

三人、四人……

そして最後の一人に殴りかかろうとする、が相手がナイフを持って俺を刺そうとしてきた。

しかし俺のまったく誇りにならない不幸経験値は伊達じゃねえ！  
相手の手首を掴み捻り刃を俺じゃなく刺してきた奴の方に向ける。

ドスッ

・・・五人目・・・

「はぁ、はぁ、あ、危なかった。死ぬかと・・・」

・・・あれ、六人目、八人目、九人目が居るぞ？

「くっそ!？」

俺は焦って倒れている奴を持ち上げ盾にし、腰に引っ掛かっている銃を抜き反撃する。

・・・まあ、射的は滅茶苦茶得意と言って置こう。

「よし、今度こそ逃y・・・」

おっと、バイクが二人乗りでコッチに向かっている。

片方はなにやら鉄パイプみたいな物を持っている。

・・・フタリノリハイケマセンヨ？

「うおおお!？」

俺は慌てて頭を下げる。

頭の上を何かが通ったよ!今!？

Uターンして来てまた俺の頭に殴りかかる。

俺はそれを避けつつ運転している方をラリアットで引きずり降ろす。コントロールを失ったバイクは鉄パイプを持っている奴と一緒に横転した。

「こ、今度こそ逃げt・・・」

絶望した。今置かれている状況と自分の運の悪さに絶望した!!!

俺の前にはざっと十名ほどの銃を構えた人が居る。  
へ？さつきみたいに避けるって？

無理無理無理無理！一人と十人の差、これいかに！

「GO TO HELL！」

俺は蜂の巣にされました。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「そう言う訳で、俺の名前は『滝音 無音』と言います。よろしく。」

「どう言う訳ですか？それと誰に向かって言っているんですか？」

「……なんだコイツ、ノリ悪い。」

金髪でワンピースみたいな着ている女のヒトが俺に言う。

「うるさいな。カメラ目線は大事だろ？」

「カメラありませんし。」

「で、平凡で心優しい不幸に塗れた一般市民（故）に何か用ですか？」

「身長195cm、顔には刃物で付いた傷跡、強面、握力、右測定

不能、左測定不能（高校2年生時）現在18歳、高校の夏休み、腕力は大型トラック片手でひっくり返すほど。

持久力は丸一日走っても汗一つかかない、いつも不幸が付きまとい不良やその筋の人に喧嘩を売られたりして、最早地域一帯では誰も喧嘩を売らないような人のどこら辺が平凡な一般市民に成るのでしようか？」

「握力測定はきつと間違いだっただよ。振り切れてあの針が曲がるなんて有り得ない！」

うん、きつと螺子が緩んで・・・」

「ちなみに貴方の測定直前に、貴方が緩んでいたと言っていた螺子は同級生の嫌がらせによってきつく締められていてその同級生が顔を真っ青にしていた事は知っていますか？」

・・・え、なにそれ。

「こんな貴方が何故学校で付き合いたい男子ブッチギリの一位だったか気になります。」

「きつと集計間違いです。」

「じゃあ貴方が告白された回数と周りの男子との差をグラフにして・・・」

「すみません、やめてください！っかきつと気の迷いなんだよ！ちゃんと俺の事を見てないから・・・」

「貴方って某10万3千冊の主人公に似てますよね。困っている人助けて、フラグ建てて、それを気がつかない間に増築していくと言



う天然フラグメーカー。」

「……そう言えばなにこの人俺の個人情報知ってんの？  
身長だって最近計ってなかったのに……  
ハッ！？ま、まさか、スト

「ストカーじゃありませんのであしからず。」

え、なにこの人。心読んでる、怖い。

「一応管理者なので、ヒトの個人情報は大体把握できていたりします。ヒトは天使とか言われますけど」

「天使さんでしたか。へ」

「そうですね。で、貴方は生きている間に積んできた善行が称えられもう一回目の生を受ける事になりました。そこで、次に貴方が生き返ると言つか転生と言つか。その場所が下手したらすぐ死ぬんでそれじゃあ面白くないと言う神様連合の意思で貴方に少し能力を授与する事になりました。」

右手に天使の力、左手に悪魔の力が付与されます。」

「……なんかあ、よく解らんのを。」

「行き成り老け込まないでください。」

そつだ、不老も追加されてますから。

まあ、大丈夫でしょうけどね。

見た目の年齢は変えられますから。

天使の力は貴方の体の耐久力、自己治癒力を上げます。

具体的に言えば上空300km程から転落しても死にません。

骨折も押さえときゃ2、3秒で治ります。

悪魔の力とはにかく力が強くなります。後身体能力も上がります。貴方の場合元々の力が強いんでチョット鍛えれば邪神クラスでもがんばれば倒せるんじゃないですか？」

・・・なにそれ、シンプルなのにチート？

つか300kmってスペースシャトルが廻つてるところじゃねえーの？

無重力じゃん。

「重力はありますよ。ギリギリ。

ちなみに普通だったらこんなふうにはなりません。普通のヒトがこの力手に入れても精々下級の魔物を倒せるくらいです。

しかしチート過ぎるのも面白くないと言う事で気、魔力は使えませんが。

あ、でも空は飛べますよ？翼出せるようにしますから。

右が天使で左は悪魔の羽だけど・・・」

バランス悪っ！！

畜生、どうせだったら統一しろよ・・・

「ブレンドして灰色の羽つても出来ますけどね。と言うかちゃんと喋ってくれない？」

普通心読まれてからは自分で喋るんですが。」

「喋るより考えるだけで伝わるって楽じゃね？」

む、なんだその微妙な顔は。

「はあ、では天使と悪魔の力を移植します。



「言つたじゃないですか。痛いって。」

いやいやいや、俺が驚いてるのはアンタが3じゃなくて2のタイミ  
ングで俺の肩に変なもん埋め込んでくれやがったからなんですけど  
ねえ！？

肩には紅いのと蒼い宝石が埋め込まれ。

変な羽みたいな刺青が……

天使のほうは白い羽のマーク、とその後が続く良く解らない言語や  
マークの羅列。

悪魔の方には黒い羽のマーク、こちらも天使のほうと同じように良  
く解らない感じで書いてある。

「まあまあ、めんどくさい事は置いておいて。あと一応意外と便利  
な魔法具あげます。

はい、これ。

これでサービス終わり。」

なんか包帯見たいのをもらった。

「おいおい、これをどうしろと？」

「腕に付けてください。その使い方をマスターするとすごい便  
利ですよ？」

凄く伸びますし、剣みたいに斬れますし、寄せ集めて盾にも槍にも  
ハンマーにも出来ますし。

あ、行く世界は教えません。

まあ、気とか魔力とか言っている時点で想像してください。

じゃ、がんばってください。

心の隅っこの方で小さく応援しているような気がしますよ？」

俺の意識は急激に薄れていった……  
と言っかなんだそれ！？結局ほとんど応援してねえーじゃん！  
ああ、意識が遠のく……

・ ・ ・ ・ ・

そんな事があつたのは覚えている。  
でもなぜ、よりによってスタートが……

「こんな竜が居る所なんだよ！！」

「ギヤオオオオオ！！！」

しかも無駄に強そうなんだよ！  
なにアレ！あの爪！！俺なんて紙みたく引き裂かれんじゃねえの！？

「くっそ！……そう言えば飛べるって言ってたな。」

とりあえず翼よ出ろと念じてみる。

「おお、でた。」

思ったほどバランスは悪くねえもんだな。  
俺の背中には烏みたいな黒い羽と、その正反対の色を持つ白い翼が  
現われた。

「I can fly・・・ヘブッ!？」

なん、だと？飛べない！

飛べない豚はただのb・・・

いや止めておこう。今はそれどころじゃない！

（飛んだ事も無いのに飛べる訳無いでしょう。人生そんなに甘くないですよ。）

くっそ！それもそうか！

（あゝ、あと飛ばす座標間違えてました。つか、ずれました。天使の転移術を揺るがすほどの不幸ってなんですか？ある意味その運がチートです。）

そ、そこまで運悪いのか。俺は！

（ハイ、疫病神が憑いた所でそんな事にはならないんですけどねえ？ま、がんばって竜討伐してください。じゃ）

さてどうする？

- 1 ・ このまま逃げる。
- 2 ・ 戦う。
- 3 ・ 話し合う。
- 4 ・ いざぎよく食べられる。
- 5 ・ モンスターボール。

うん、俺ってバカ？

なんだこの選択肢！

1、2、までは許そう。

3、4、5！なんじゃこりゃ！？バカにしとんのか？

くそう！此処は・・・2番！！

俺は振り向きざまに跳躍しアッパーをする。

・・・あれ？なんかすごい勢いですが、すごい高さまできてんだけど！？俺は竜の腹に当てるつもりが顎に当たってしまった。  
いや良いんだけどさ。

ズズンッ！

竜は倒れた！

・・・これからどうしよう。

とりあえずこの翼の制御とこの包帯の扱いと力の制御が出来るようになってから考えよう。

こうしてなんだかグダグダのうちに俺の第二の人生は始まった。  
・・・そもそもここは何の世界だ？

（10年後）

森の入り口・・・

「やれやれ、出張でこんなに遠い所に来るなんて久しぶりだ。  
でも依頼内容、これ本当なのかなあ。」

白いスーツを着たタバコを吸っている男が居た。  
そして男が除いている紙には

『森に住み込みその森の魔物を率いている人間（？）が居るので捕縛して欲しい。』

「・・・魔物って人になつく物なのかなあ。」

そう言い残しタバコをふかしながら森の置くへ歩いていくのであった。

つづく



不幸人は旅に出ます。

side 無音

アレから何年たったんだろうか。

少なくとも5年以上は経っている。つーかそこから数えてない。

ずっと修行して飛べる様にもなったし、力加減も出来るようになったし、包帯(?)みたいな魔法具も扱えるようになってきた。

でも言われたとおり気や魔法は使えないみたいだ。

使えないだけで魔力も気もあることにはある。

存在を感じる事はできるが体の強化が出来ない。まあ、それについてはもう考えたのだが。

修行に関してはおふざけで感謝の正拳突き10000本とかやってみた。

他にも重い岩背負いながら森の中を50000週とか？

あと変わった事は……

髪の色が赤くなった。あと髪を切ってないから凄く長くなってきている。

人と話さないから言葉の発音が怪しくなってきた。

それと此処に来た時に倒した竜がちっちゃくなってしまった、子猫くらいに

しかもなんか懷かれてしまったのか俺の頭の上から離れない。

つーか、取ろうとすると爪引っ掛けてきて痛い。

それとこの森の生態系の頂点に立った！

……森の中のトップって言ってもねえ？

俺が狩りに行く時とか何匹か魔獣が付く様にもなってしまった。何故だ。

身体的な変化は・・・この間デコピンで岩割ったな。

アレの片付けしてないや。誰か転ぶかも・・・

後身体年齢が変えられるって言ってたから変えてみた。

年齢換算で16歳くらい？でも187cmくらい身長有るんだけど・

・・・

まあ、別におかしくないだろう！うん、おかしくないおかしくない。

「ピギャウ！」

「・・・腹へったのか？ご飯獲りに行くか。」

「ギャウ！」

俺は羽根を出して飛び立った。

side 白いスーツの男

それにしても何故こんな任務が周って来たんだろうか？

こう言う任務は普段は他に廻されるんだけどなあ。

「ん、おっと。なんだこれ」

明らかに故意に壊された岩の破片が散らかっていた。

「ここら辺に住む魔獣の仕業かな？」

そう言っていると魔力が感じられたので僕は上を見上げた。

「・・・鳥？いや、人！？」

アレはなんだ？烏族か？

いやでもこんな所に烏族の集落は無いはず・・・  
コツチに来る！？

side 無音

久方ぶりの人だ。

最近狩人の人とかに会っても逃げられてしまっから少し悲しい。

「お前、だれ？」

「僕はタカミチ・Ｔ・高畑と言っんだ。君は？」

うっわ！タカミチだよ！言われてみれば・・・でも少し若い気も・・・

そうかそうか、でもこの世界はネギま！の世界か。

今原作何年前なんだろうか？それとももう始まつてる？でもタカミチが若い気もするし・・・

そう言えば何しにきたんだ？

「俺、滝音 無音、コイツ、レイ、何しにきた？」

レイって竜の名前ね？

「えーと、君を捕まえに、かなあ？あ、でもとりあえずついて来てくれるんだったら拘束もしないけど。」

・・・は？俺を捕まえに？何故？俺なんか悪い事したか？

「俺、何か、悪い事、した？」

「・・・悪い事はしていないんだと思うけどね。此処からあまり遠くない村からの依頼だね。  
怖がっているみたいないんだよ、君の事を」

あゝ、確かに思い当たる節が無いわけじゃない。

「わかった、ついていく。」

「じゃあ行こうか。」

「飛んで、行く」

ちんたら歩ってられるかよ

「うわっ！？ちょ、待って！！」

俺はタカミチの腕を掴んで町まで飛んでいった。

（20分後）

「この子が森の化け物の正体？」

「はあ、たぶんそうだと思いますけど・・・」

なんかお爺さんと話している。依頼主があの人なんだろうか？  
む、こっち来た

「君、歳いくつだい？」

「16歳、くらい。」

・・・む、なんだその顔は、悪かったなでかくて。

「君はいつからあの森に居たのかな？」

「・・・少なくとも、5年以上、9年？10年？・・・そのくらい。」

む、よくよく考えてみるとおかしくないか？これだと6歳頃から森に住んでいた事になる・・・  
ま、いつか。

「「・・・」」

よくなかった！！なんか重い！！空気が重いい！！  
酸素を！純粋な酸素をおおおお！！  
そんな事を思っていたら何か知らんがこの村の村長さんとタカミチの話が終わったらしい。

「それでは村長、この子はとりあえず私の知り合いの所へ預けようと思います、よろしいでしょうか？」

「ええ、よろしく頼みます。」

私達が気づけなかったせいですと一人で居たなんて、それどころか恐れてしまっていたなんて・・・本当にすまなかったね。」

おお、なんか本当にシリアスモードだ！

まじでこう言う空気嫌いなんだよお！

ゲームとかマンガとかやっててもなんかこう言う雰囲気の時こう、

ぐつ、と胸の置くが、ぐつ、と  
ああ、嫌だなんか。

「…………別に、いい。」

ああ、なんか心なしが声が震えている気がする。

「幸い此処はゲートからもあまり遠くない、早速行こうか。」

「行く、どこへ？」

「旧世界、日本の麻帆良学園だ。」

まじですか？

そして俺は、長いのか短いのか解らない森でのサバイバル生活に別  
れを告げて麻帆良学園へと赴くのであった。

sideタカミチ

森で見つけた彼は驚く事に6歳ほどからあの森に居たと言う事がわ  
かった。

どうやって生きてきたのか。どんなに辛かったのか想像できない。  
だからこそ僕は彼にはこれからでもちゃんと過ごして欲しいと思う。

「よし、ついた！ここが麻帆良学園都市だ……………って、あれ？  
無音くん！？」

…………まさか、迷子？

とりあえず学園長に会いに行くとは言って置いたから学園長室に向  
かってくれるかな・・・

side 無音

麻帆良de迷子！hey！！

・・・いやー、何年も人里出てないと人混みって凄いですね！  
タカミチに付いて行こうとしてんのにどんどん引き離されるの。い  
やー、どうしようっ！！！！

まー、悩んでも仕方が無い。

学園長室に行くとか行ってたし、まあ道を聞いてりゃ行けるだろう。

「それにしても、広い。喋るの、慣れない。・・・とりあえず、道、  
聞く。」

うう、なんか変だ。後2、3日喋ってれば慣れてくるはずなんだけ  
ど・・・

それよりまず道、道を聞かなくちゃ。

お、人発見！・・・

「お嬢さん、道、聞きたい。」

「ん？ええよ」

む、和む子だな。

「学園長室、わかる？」

「ん？お兄さん、おじいちゃんに用があるん？」

・・・O・J・I・I・T・Y・A・N?

まさか、近衛 木乃香ちゃん?

「・・・学園長、お孫さん?」

「そつやえゝ?このか言うんよ。」

「何歳?」

「12歳や。今年中学1年生になったんや」

「・・・間違いない。と、言う事は、原作1年前?  
まあ、後で考えよう。」

「学園長室、行きたい。道、教えて欲しい。」

「じゃあ、こつちやゝ」

そう言つて走つていく木乃香ちゃん。  
俺も早くついていかないと迷うな。

・  
・  
・  
・  
・  
「高畑センセ、こんにちわ」



「やあ、このかくんと無音くん！心配したんだよ。ちゃんとして来てくれなきゃ。」

「ごめん、人混み、慣れてない。」

「このかちゃん。案内、ありがと。」

「どういたしまして、じゃあ、ウチはいくわ」

そう言つてまたパタパタと走っていった。元気な子だ。

「じゃあ、入ろうか？」

「解つた。」

タカミチは扉を開ける。

・・・そこには人類の深さを物語る人が居た・・・

これが人類と言うカテゴリなんだよな・・・

「ふおつふおつふお、その子が高畑君の言っていた子かね？」

「滝音 無音、16歳。」

「ふむ、近衛 近右衛門じゃ。さて、無音君。事の顛末は聞いておるが。」

君はどうしたい？君が臨むのなら学校へ通つてもいいよう手配しよう。」

「・・・勉強、できる。今更、しなくても、大丈夫。」

「できる？どの位じゃ？」

「大学とか言うの、卒業、できるくらい」

そう、勉強は無駄に出来たのだ。

「ふお？なぜ大学なんてしつとるんじゃ？」

「6歳まで、普通に暮らしてた。勉強は6歳で、修めた。」

テキトーだけどな？

「ふむ、魔獣がすんでいる森で生活していたんじゃったのう？」

「あの森、俺、一番」

「・・・なんか嫌な笑みを浮かべたぞコイツ。  
はっ！？ま、まさか！

「広域指導員に決定じゃの。それと教師をやって貰いたい。」

「・・・こんの人外め！

俺は慌ててタカミチのほうを見る。

しかしあちらも慌てて俺から眼をそらす。

あ、てめえまさか本当に人手不足だから少しでも居てくれたらうれしい、的なこと考えてやがるな！？

「ま、まあ、この学園広いし慣れるためにもちょうど良いんじゃないかい？」

おい、俺の目を見て言ってくれるかそう言うことは？

「ふおっふおっふお、じゃあ決定じゃの。高畑君、彼にこの学園を  
しょうかいしてやってくれ。ワシは手続きをする。」

「解りました。じゃあ行こうか。無音君」

俺の意思関係ないんすか？

まあ、いいや。俺はタカミチの後ろについていこうとした。が・・・  
なんか良く解らん人混みに流されまたもはぐれてしまった・・・  
・・・とりあえず適当に廻ってみるか。

「世界樹・・・でかいな。」

夕焼けがバツクになっていて綺麗だ。

かなり遠い筈なのに此処から見えるな。

たしかゲートが在るんだっけか？ま、どうでも良いか。

「あれ？さっきのお兄さんやん。」

「このかちゃん？」

おお、また会えた！これは奇跡。

「また、道、迷った。タカミチ、どこ、解る？」

うっは、なんかやつぱり喋り方変だ！

早急に喋るのに慣れんと・・・

「また迷ったん？じゃあ、探しいこー！」

ええこやゝ、癒されるし。

もう本当に良い子だ。

そして俺はこのかちゃんについて行こうとしたが。

「……あれ？居ない。」

気付いてみればあたりに人の気配が無い。

森に住んでいた俺はこう言うことには敏感だ。

「貴様、何者だ？」

おお、このパターン。桜咲さんですか。そーなんですな？そーですか。

「俺、滝音 無音。今日、学園、来た。」

「お嬢様を浚う為にか！」

なんでそう安直な思考なのでしょう？

「違う。タカミチ、探す、手伝って貰おうとした。」

お、ちょっと話すの慣れてきた。

「何をぬけぬけと！貴様みたいな奴が高畑先生の知り合いな訳無かるうー！」

そう言っていると俺に向かって大きな太刀で斬り付けてきた！？  
っ！か意外と失礼だな！？

「くっ！あぶないな。」

「避けたか！だが次は外さん！雷光剣！！」

「ちっ、めんどくせえ。」

雷をまとった剣が振り下ろされる。

そんなモン森に来た竜種の魔法に比べたら爪楊枝なみだ！

俺は膝を曲げ思い切り前へ進む。  
瞬動ってやつだ。

「なに！？」

「フッ！」

勢い良く背後に立った俺は背中を蹴り飛ばす。  
手加減はしてます。

「くっ！？え・・・うわあああああ！？」

・・・やべっ、加減間違えた。

10m程

飛んで行ったところで地面に落ち気絶したようだ。

「・・・手加減の練習してたのに。あ、あの森の奴らが強すぎたのか。

そりゃ吹っ飛ぶな。」

・・・殺気がするな、何でだろうか？  
とりあえず」

「コツチか！」

魔法具の包帯で弾く。

・・・なんかよくよく見てみるとあれだ、カゲタロウ(?)の技に似てる。

「って、そんな事考えてる場合じゃねえか。」

そう言っている間にも的確に俺に打ち込んでくる。  
龍宮さんですよねえ？あなた

「・・・タカミチ、何故に来ないし。」

とりあえず俺は逃走を計るのです。

不幸人の弱点は……。

side 龍宮

「なんだ、アレは……。」

さっきのアレは何だったのだろうか。

動かない表情、暗い瞳、まるで機械のようなモノ。

人間？あんな人間が居てたまるものか。

魔族？そんな生易しいものじゃない。

自分の絶対の自信のある魔眼を疑った。

いや、間違いであって欲しかったと言った方が良かったらう。

それだけ

信じえるモノではなかったのだ。

人の形をしているからこそまた得体の知れない怖さが増してきた。

「……くそっ」

少し震えているのを押し込め、仕事仲間の所へ急ぐ。

敵としてアレに出会わないことを信じて。

side 無音

「俺、敵、違う。」

皆様元気でしょうか？

僕は元気です……元気ですがね？

今、 GANG 口、脱げ女、掃除娘に囲まれています。

あと治り掛けてると思ったこの口調。戦闘が終わったら元に戻った。なにか？テンション上がってキタアアアアアアア！状態の時だけ治るのか？

まあいい。それより……

「よくもそんな抜けぬけと！すでに龍宮さんからの伝令はこの学園の魔法生徒、及び魔法先生に回りました。」

「……どうしてこう人の話を聞かない人が多いかねえ？  
もうチョット耳を傾けてくれよ。」

「行くぞ！！」

そうガングロが言つて、三人は動き出した。

まずガングロが先行して俺に向かい銃弾を三発。

それに平行し、ナイフを逆手持ちで近づいてくる。

その後ろで掃除娘が詠唱を始め、脱げ女も影の使い魔を5体出してから詠唱に入る。

あゝ、めんどくせえなあ。

目の前の出来事だけに集中する……

まずはガングロ。

銃弾を包帯で絡めとり、一気に俺も加速する。

慌ててナイフで斬ろうとしてきたが、その手首を手刀で打ち据える。  
ナイフを取り落としたのを見計らい、その手を引き付け背負い投げ。  
すぐ後ろに迫っていた使い魔を2体ほど押しつぶす。

……あと接近3体に遠距離2人。

一番近くに居た使い魔の後頭部を掴み思い切り膝蹴りをする。

着地した瞬間真横に来ていた奴に裏拳で吹き飛ばし、その勢いでもう一体蹴り飛ばす。



・・・あと二人

「影の百槍！」

「紅き焰！」

しかし詠唱は完成してしまったようだ。

脱げ女の攻撃は包帯で迎撃する。

問題は炎。

この世界に来てから何年経つか知らないが解った事がある。

俺は決してチートじゃない。

天使に体が有り得ないほど頑丈になるとか言われたが、アレは正確じゃない。

実際の所を言えば、衝撃、打撃系に関してのことを言っていたのだ。しかも魔力的な処置は成されていないので打撃でも魔力が使ってあるとそれなりのダメージになる。

しかし、俺の不幸経験値をなめるな！！

あの森じゃ、火を噴かない奴の方が珍しいんだよ！！

俺の努力を見るが良い！！

「ハアツ！！！」

ドオオオオオオン！！！！

はつきり言ってますごいなー！

俺が突き出した拳によって空気が振るえ炎をかき消した。お？掃除娘が倒れた。拳圧があっちまで行ってたかな？

「メイ！よくも！！！」

「怒っている所悪いが。」

「え？」

俺っちが瞬動使えないとでも？

脱げ女の横に立っている俺。

慌てて使い魔を出そうとしていたが手刀で意識を刈り取る。

「終わり、めんどくさい、手加減、難しい。」

・・・また口調が、まあ仕方ない。

む、また人の気配！？

そう振り向いたら十字架が飛んできました。

「うつ！」

左手に当たった・・・へ？

ドサッ

左手が・・・急に、重・・・く！？

え！なにになに！？まさか悪魔の左手ってそんな性質まで悪魔に何の！？

十字架ダメ系ですか！浄化されちゃうんですかあ！？

恨みがましく投げられてきた方向をしてみる。

・・・なんかポカーンとしてる人が2人。

無表情で肩車されてる子が一人。

「へ？あ、あれ？なんでガンドルフィーニせんせー達あっさり倒し

た人がシャークテイのゲームで言えば弱攻撃で倒れるの?」

「・・・ああ、そう言うことね?

でもどうしよっかなー。左手あと10分は動かなそうだし。右手は動くけど。」

「と、とりあえず美空、高畑先生と学園長に連絡を。」

「ラジャー、えーと、携帯携帯・・・。」

まあ、よくよく考えてみれば俺って別に何もしなくても敵じゃないんだから良いんだけどさあ?

「え、へ?お客?え、高畑先生が・・・はい。」

えゝ、シャークテイ?」

「何ですか美空。その何かを壊した後に誰かに見つかったような顔は・・・。」

「実は・・・。」

「・・・まずいですね。で、高畠先生は?」

「今向かって来てて、もう着くって話ですけど・・・。」

「無音君!..!」

「む、タカミチ。お前、遅い。歩くの、早い。」

「ごめんごめん、怪我は?」

「無い、でも動けない。」

ホントに体がだるい。動きたくない。

「・・・ちよつとごめんね？」

む、なんだタカミチ。人の額に触れてきて。

「熱い。とりあえず保健室へ・・・。」

あゝ、確かに、頭痛いかも・・・

それに少し寒気も・・・

あと眠気が・・・

そして意識が沈んでいくのであった。

・・・眩しい。朝か？

「やあ、起きたね。」

「む、タカミチ。」

「急に環境が変わって疲れてた所に戦闘だからね。体調を崩したんだろう。」

「確かに、疲れた。話、聞かない奴、多すぎ。」

「ハハハハハ、それはなんとも言えないな。」

「俺、怒った。昨日の話、教師の方、断る。」

「ハ、ハハハ、はあ。まあ、しょうがないね。学園長も謝ってたことだし。」

でもその気に成ってくれるんだったらやってくれるとうれしいな。」

「知らない。」

まあ、原作が始まる時とかだったらやってやらん事も無きにしもあらず、だ。

広域指導員はなんか楽しそうだし。

それにしても、喧嘩止める時とかどうしょ。

手加減……まあ何とか成るか。

そう言えば

「ここ、どこ？」

「ここは君の家だよ。これからはここに住んでくれ。ご飯とかは一応店とか有るけど……」

「いい、作れる。」

「そうか。じゃあ今日はゆっくり休んでくれ。」

熱も下がっているようだけど無理はよくないからね。

ああ、明日の7時位に学園長室に来てくれるかい？」

「解った。」

「じゃあ、僕は帰るよ。」

「ごめん、迷惑かけた。」

「ハハハ、気にしなくて良いさ。じゃあね。」

「……行っただか。」

それにしても、眠いなあ。

……グウ。

side 学園長

ふむ、これは失敗じゃのう。

来年の事を考え彼にはあのクラスを担当してもらいたかったんじやが。

「こんな結果になつては文句は言えんからのお。まあ広域指導のほうを受けてくれるだけでもよしとしよう。」

「……それにしても。彼の戦闘力。」

一度確かめてみたい所じゃのお。

フオッフオッフオッフオッフオッフオッフオ。

その後怪しい笑い声が学園長室から響き渡っていたと言つ。

side 無音

「ピギョ〜!」

「む、レイ、おはよ。起してくれてたのか？」

・・・今は、A・M・6:47・・・

「遅刻・・・」

俺は目にも留まらぬ速さで着替えレイを頭に載せ学園長室へ急いだ。

ヤバイヤバイヤバイ！仮にも雇ってもらった立場の人間が遅刻なんて事をしたならそれこそ品性が疑われる・・・って!?

「危ない!」

「へ？ひゃああああ!？」

ゴシヤアアアアアンツ!!

「ちょ、ちよつと木乃香大丈夫!？」

「うう、大丈夫や。そつちはだいじょーぶ？」

こ、このかちゃんだったのか。

うっ!?!中途半端に避けようとしたから頭ぶつけたか?くらくらする・・・

「あれ、おにいさ「ちよつとアンタ!ぶつかつ」といて謝りもしないって言うの!?!」あ、アスナ〜!」

う、ぐぐう！？え、襟を持つな。頭を振るな。し、死ぬ・・・

・・・ガクッ

「あ、アスナ！？その人氣い失つとるから！それに知ってる人や！」

「へ？え、で、でも・・・」「無音君！？あ、アスナ君。チョット彼をコツチに渡してくれ！」た、高畑先生！？」

sideタカミチ

無音君が遅い。途中で何かあつたのかな？

「学園長。一応様子を見てきます。」

「ふむ、そうしてくれ。彼は何だか不幸な星の元に生まれてきてるようじゃから何かに巻き込まれてるやもしれん。」

まあ、どんなに不幸な人でもそこまで朝から厄介な事があるとも思えないが・・・

そして通学路。

彼が居ないか周りを見ながら歩いている。  
すると・・・

「あれ、おにいさ「ちょっと 안타！ぶつかつ」といて謝りもしないって言うの！？」あ、アスナ！」

この声はアスナ君とこのか君か・・・  
いつも少しだけ騒がしい自分が受け持つクラスの生徒の声を聞きそ



ちらを振り向く・・・

「あ、アスナ！？その人氣い失つとるから！それに知ってる人や！」

「へ？え、でも・・・」「無音君！？あ、アスナ君。チョット彼をコツチに渡してくれ！」た、高畑先生！？」

油断していた。彼の不幸は本当に推し量れないな・・・  
気を失つてただけか。

「ギャウ！」

「・・・レイ君。なんでここに居るんだい？」

「きゃー、かわええ〜」

彼の上には彼の使い魔？をこのか君が持ち上げた。  
魔法の秘匿もあつたもんじゃない。

でも幸いこの学園では色んなモノがありすぎてはつきり言ってこんなもんじゃばれない。

「うう、うん。はっ！？」

「お目覚めかい？ホント君は色んな事に巻き込まれるねえ？」

「俺、臨んでるわけ、違う。急いでた、ぶつかった。」

「そうだったのか。このか君にアスナ君怪我は無かったのかい？」

「え、ぶつかったのはこのかだったんで・・・」

「ウチは大丈夫や。無音さんは大丈夫なん？」

「大丈夫・・・ん？俺、名前、言っただ？」

「高畑せんせーが呼んでたの覚えとったんや。」

早速知り合いも出来ているみたいだね。

「あー」

「・・・なに？」

「ごめんなさい。やりすぎたわ。」

「・・・??」

「・・・ああ、覚えてないな。」

あ、もうこんな時間か。

「ごめん二人とも。僕達は少し行かなくちゃならないから。」

HRの時にね。行くよ無音君。」

「じゃあね。」

「え、あ、ちょ。この子・・・」

「・・・それにしても、こんな感じで広域指導員が無事に出来るの  
だろうか？」

疲労で倒れるとか洒落にならないんだけどなあ・・・

一人悩みを抱えるタカミチでした。

「タカミチ」

「ん？どうしたんだい？無音君。」

「レイ、居ない。知らない？」

「えゝ！？」

教室にて・・・

「このか、それ何？」

「ちょっと知ってるおにーさんのペットなんやけど返しそびれてもーて。」

「かわいいーですー。」

「なにこれ？鳥かな？」

此処までが一般生徒。

「（おい、刹那。アレ竜種だぞ？）」

「（な、なに！？なんでそんなモンが居るんだ！）」

・ ・ ・ ・ ・

「ハハハハハハハハ。」

「タカミチ、壊れるな。」

訂正、一人で悩みとストレスを多大に抱え込むタカミチでした。

不幸人の弱点は・・・。(後書き)

弱点は十字架でした。

不幸人のステータス。と、不幸人の質問地獄。 二本立てです？

名前：滝音 タキオト ムオン 無音

年齢：一応16歳？

身長：187cm

能力：悪魔の左腕・握力、腕力、脚力、運動神経、その他諸々が凶悪なほどに強くなる。手加減練習中。左肩のあたりから黒い羽が出せる。3本が限界。十字架で力が失われるらしい。ある意味シスターシャークティは天敵。

天使の右腕：回復力、体の強度が上昇。天使さん曰く上空300kmから落ちても平気らしいが、主人公が体験している話だと絶対そんな強度はない、らしい。右肩のあたりから白い羽が出せる。3本が限界。

気、および魔力は有る事には有るが使えない。

外見：赤い色の髪で、魔法世界の森に居る時はかなり長かったが、麻帆良に来る時に肩の辺りまで切り落とした。

本人はまったく気付いていないが表情に乏しくなっている。

言葉も戦闘中にテンションが上がっている時だけ普通に話せるが普段は片言。

顔は前世ほど強面ではなく上の中くらい？

服は今の時点ではタカミチに買ってもらったタンクトップと動きや

すい長ズボンしかない。

好きな物：食べ物（特に甘いもの）・睡眠

嫌いな物：面倒事・面倒事を押し付ける奴・話を聞かない奴・十字架？

その他：何かと不幸でその不幸は天使の魔力での転移も揺るがすほど。ちよくちよく迷子になったりもする。

他にも森に居たせいか若干感覚が麻痺している所もある。

種族は人間だと思うが龍宮さん敵にはありえないと全否定されている。

使い魔？としてレイという小さい黒龍を連れている。大概頭の上に乗っているのだが、現在2-Aに捕縛（？）中。

技：感謝の正拳突き・眼にも留まらない速さで正拳突き。直線状100m程なら拳圧が届く

超チヨップ・物凄いチヨップ。

主人公オリジナル・不幸拳法

参天闘立・最初に鳩尾に肘打ちしてから裏拳で顎の先端を揺らし、最期にボディーブローをし立ちながら気絶させる技。

真神震拳・拳を振動させながら腹を殴る。内臓に直接響く。

ウスマキシンド

渦巻伸打・詳細は良く解らないが行き成り敵の前で回転して、回転終わったら敵がぼこぼこに成っている。

キンコンカン

琴紺冠・肺に手の甲で攻撃し、その後脚払いで体制を崩し、転びそうになった所で米神に肘撃ちするえげつない技。

ウロボロス・唯一カタカナ。肉体強化の方法、詳細は不明。

ギョシヨク

戯護喰・三国志に影響されて命名。ウロボロス発動時に出来る。こちらにも詳細は謎。

その他増えるかも？

では本編

side無音

レイが居なくなった件。

まあ、タカミチがたぶんこのかちゃんだろうって行ってたから虐められたりはしないだろうけど・・・

ん？いや、虐められるの心配してんじゃなくて虐めるほう心配してるんだよ？

アイツ火噴くし、爪無駄に鋭いし、力も無駄に強いし。

まあ、それを言ったらタカミチが信号みたいに顔色変えて面白かったな。

で、今学園長室に居ます。



「……以上が広域指導員の仕事じゃ。後これが広域指導員の証明書じゃ。」

「……まあ、省略すればテキストに歩き回ってヤンチャしてる奴を潰せ、と言っているわけです。」

「解った。喧嘩してる奴、潰す。」

「……手加減してくれるとうれしいのお。では高畑君。今日はHRだけじゃったな？少し具体的に説明と学園の案内をやつとくれ。」

「はい、解りました。」

「……俺もですか？」

「昨日の件で気まずいんだが……」

「でもレイが吸血鬼とか昨日の二人とかピエロちゃんに何かされてもいやだし……」

「うーん、悩み所だ……」

「それにしても、その格好はどうなのかね？」

「む、普通の服。これしか、持っていない。」

「ま、今の時期じゃしのお。大丈夫か。」

「こつち来る時タカミチに買ってもらった。」

「暑そうだったからタンクトップとズボンだ。」

「あいにくとそんなに買う余裕もなかったからこれしかない。」

「まあタンクトップといっても腕は包帯で隠されてるから別に良いと」

思う。

と言うか今の時期？

それにホームルームだけ？何故だ……今日の日付は出る前に確認出来なかったんだよなあ。

でも6月だったな。何かあったわけ？

「無音君、着いたよ？」

「む、いつの間に!？」

「いつの間に、って黙って付いて来ていたじゃないか。」

むう、集中しすぎて気付かなかった。

『ピギャウ!~!』

『ああ、どうしたん?』

『ああ、あっち飛んでった!』

『私がリボンで……』

『そんな事したら可哀想でしょう!』

『ゆうな!そっち行つたよ』

『へ?え、ちょ、わわわ!?』

『おい、どうすれば良いんだ。龍宮。』

『いつそ麻醉銃で……』

レイが危険だ！危険すぎる！！

「あ、ちょ！待ってくれ無音君！」

「レイ！！」

「ピギユ？ピギヤウー！！」

レイが俺の胸に飛び込んできた。

おーおー、こんなに震えちゃって、お前でもこのテンションの連中は怖いんだな。よしよし。

なんて事をするんだまつたく……

「あ、さっきの喋り方が変わってる人……」

「あ、おにーさん。ごめんな？返す前に行っちゃったから返せへんかったんよ。」

『『『『……誰？』『』『』』

……後先考えてなかった。

・  
・  
・  
・  
・

「ねえねえ、その鳥みたいな子なんて言うの？」

「かつこいい。年いくつ？」

「彼女は？」

「タカ、ミチ……た、たすけ……」

「ハハハ、皆。とりあえず席に付いてくれるかな？」

じ、地獄だ。嫌だ、怖い。テンション高すぎ。

それに後ろの方で俺に向かつて敵意むき出しの人が二人も居るんだ。あと吸血鬼さんがコツチを興味深そうに見てます。

タカミチ、俺あんたの事尊敬するよ。良くこのクラスをまとめられるなあ……

そんなこんなで俺は端っこで傍観している事に。

む、アレが幽霊ちゃんか。コツチ見てるな、手を振っておこう。驚いてる驚いてる。

「えーと、今日から本格的に麻帆良祭の準備だから怪我しない程度に楽しんでね。」

この間の話し合いでは決められなかった出し物についても決めるように。」

「「「「「は~~~~い!!!!」「」「」

「それと彼は今日日付けで広域指導員になる子だ。無音君自己紹介を」

うつへえ、しなきゃいけないの？

「滝音 無音、16歳、よろしく。」

「僕達は少し仕事の話が有るから気をつけて準備に取り掛かってくれ。」

「じゃあ行こうか無音君。」

「解った。」

ふう、やっと開放された。

「ピャウ！」

おお、お前もうれしいか。よしよし。

それにしても麻帆良祭か、今年は何事も無いだろうし楽しむとしようかな？

side 刹那

昨日負けた奴がウチのクラスに来た。

高畑先生の知り合いだったのは本当だったらしい。

・・・いつか謝らなくてはいけないな。

ふむ、しかしどのタイミングで謝ったものか・・・

龍宮に相談してみるか？

今はちょうど準備するために立ち歩いているから別に良いだろう。

「おい、龍宮・・・どうした？」

「へ？あ、いや。なんでもない。」

「……顔が少し赤いぞ？熱か？」

「そんなんじゃない。大丈夫だ。」

……？

まあ良いか。

あれ？何を聞こうと思ったんだっけ……  
まあ後で良いか。

side 龍宮

あれが昨日の？

いや、でも、昨日ほど機械的ではなかったな……  
さっきの竜種を撫でている時に笑ったし……//  
ま、まあ、悪い奴じゃないんだらうという事だけ覚えてくか。

龍宮は知らない。ギャップ萌えという言葉……

これがそれに当てはまるかはまた別で。

まあ、最初の邂逅が戦闘、しかも感情がまったく無いと思っていた  
相手が、その決して悪くは無い顔で優しく微笑んだら少し気になり  
はするだろう。

side さよ

……さっきの人、私が見えてた？

これまで沢山の霊能力者の人が来ても見えなかった私が……  
また会えるでしょうか……

side 無音

「まあ、とりあえず今見たいな感じで良いからね？多少手荒かもしれないけど。」

「解った……。」

すっげー、やっぱつえーなタカミチ。

喧嘩している大学生の団体さん無傷で2分くらいで鎮圧とか。

「じゃあ、今日はこれくらいかな？僕はこれからさっきの教室に戻って連絡事項とか言わなきゃ行けないから戻るよ。じゃあね」

……行ってしまった。

まあ良いや。世界樹、一度近くで見てみたいな。

よし、行ってみよう。

「と言う事で、来た。何しよう。」

……独り言でも片言とかwww

はあ、自分で行って悲しくなるな。

しかも道中色々あってもう夕方ですよ？

俺の精神HPはゼロです。

「ピギュー！」

「ん？腹減った？じゃ、帰る。」

「まあ良いじゃあないか。そんなに慌てずとも、今夜は満月。月見

でもしてから行ったらどうだ？なあ、ぼっや。」

「っ！？（接近に築かなかった！森での生活でそう言うのは敏感に成ったのに！）」

「氷爆！」

「翼よ、3対出だよ。」

黒い翼と白い翼が3本出てきて自分の前で交差し、そこに包帯で補強をし防御する。

「ほう？なんだその翼は。貴様も人外か？烏族・・・いや違うな。烏族の羽はそんなじゃない。」

くっ！翼が凍る！？

一回消すか。

「消失も自由自在。」

人間ではないのは明らかだが、何だ？

それにその包帯の魔法具・・・

フハハ、久々に面白い！」

「俺、面白くない。早く、帰る。」

「そうはさせないさ。茶々丸！」

「了解しました、マスター。」

うえ！？いつの間に！



ちっ！集中だ！

「レイ、どっかいけ。」

「ピギャウ！」

レイが戦闘範囲外に出ていくのを確認して、俺も走り出す。

メカ娘がこちらに突きを入れて来る。

流石機械。するどいな、ためらいが無い。

それを少し手を添えてそらし、自分も攻撃を繰り返す。

むう、当らない・・・

ゲームで言う中ボスか！

「くっ！真神震拳！」

よし！入った！！

・・・でもロボに効くのか？これ。あ、吹き飛んだ。外装も削れてるな。よし、成功だ！

「氷爆！！！」

「う、お！？」

俺はとつさに横へ飛び避けた、が

ピン

「糸！？くっ！」

脚をとられた。慌てて包帯で糸を切る。

しかしその動作を行った時目の前に吸血鬼さんが！

「フンツ！！」

「くっ！」

たかだか十歳程度にしか見えない女の子の力じゃないよな？これ。攻撃してもいなされ。攻撃される時は懷から当てられる。此処まで身長差があると超接近戦は不利だ！

「我が必殺！参・天・闘・立！！」

決まった！

と思った・・・

「くっ、今のは危なかったな。しかしえげつない技だ。今の力加減だと立つたまま気絶するぞ？」

「そう言う技だ。」

「しかし、私に勝つには錬度がまだまだだっ！！」

回し蹴り！？

「ちいっ！！」

慌てて防御しようとするが間に合わない。  
いや、間に合う！

片足立ちになっているほうの足を払う。

「むっ！」

「ぐう！！！」

よし、耐えた。

この距離だったら・・・

「渦巻伸打！」

「なんじゃそりゃ！くっ！むっ！！ぬあっ！？」

防御しているが連打に続く連打。しかもアッパーで龍を撃墜するよ  
うな超筋力で、だ。

当然、吹き飛ぶ！

「ちっ！氷爆！！！」

「翼よ、3対出だよ！」

ピキィィィン！

「ふん、やるではないか。最弱状態の私とは言え此処まで戦える  
は・・・」

「なんで、俺、襲う。」

「あのジジイに頼まれてな。個人的にも興味が出たからちよつと満  
月の夜に襲撃したんだよ。

実際、面白いものを見つけた。」

うっは、物凄い笑顔です。

「ふん、おいお前明日放課後また此処に來い。強制だ。茶々丸、大丈夫か？」

な、なんか無理やり約束を取り付けられてしまった。  
く、くそう！すっぱかしてやる！！

まあ、御人好しの主人公にはできない事ですが……

不幸人は御人好し。

side 無音

今日の放課後は吸血鬼に拘束されてしまったので、それまでどうしてようか……。とりあえず見回りするか。

・  
・  
・  
・

「んだゴラア！俺たちに喧嘩売ろつてのかあ！？」

「先に手え出して来たのはそっちだろうがあ！！」

・・・俺の仕事は、取り合えず喧嘩している悪い子を――

「ツブス」

バキッガギャッゴシヤングシャメキッドゴッ！！！！！！

「もうやらないように。」

「すすすすすすすすす、すいませんでしたあああああ！！！！」

うんうん、素直でよろしい。

『なんだやるつてのかあ！！』

お、あつちでも  
いや、ストレス発散にちょうど良いねえ

5 時間後

午前中だけで9回？

あれ、今日って平日だよなぁ？  
何でこんな歩き回ってるの？

「飯、食いに行くか。レイ」

•

「……ん？レイ、居ない？」

「ヤバイ、なんか嫌な予感が……どこへいったんだ？」

Sideタカミチ

「……と、言うわけでこの訳はこうなる解ったかい？」

「はい」

「ハハハ、じゃあ次に……」

「ギャウ！」

「……疲れてるのかな？レイ君の鳴き声がしたぞ？

「あゝ！こないだの子だ。よしよし、こっちおいで。」

「あれゝ？レイくん、どうしたん？無音さんは？」

「ピャウ」

「……無音君。またなんかあったのかい？

ちゃんと見ていてくれなきゃ困るんだけどなあ……

キンコーンカーンコーンッ！

「む、じゃあ、今日の授業は終わりだ。出し物、早く決めないと間に合わなくなっちゃうからね？

さて、レイ君、無音君のところへ帰るよ？」

「ピャウ？」

僕はレイ君を持って教室を出て行く。

さて、彼は今どこに居るだろうか……

side 無音

さてさて、レイがどこに行ったのか解らんが俺は腹を満たし、見回りを再開し、午後で4回と言う喧嘩の検挙率

治安が悪いねえ。

・・・あのクラス行ってるのかもなあ。なんだかんで木乃香ちゃんには懷いてみたいだし。

「行つて、みるか。」

そして1-Aに赴いた訳なのだが・・・

「何で、こーなる・・・」

「ハハハハハ、良いじゃん良いじゃん。チョット見てつてよ。」

「レイ君は高畑せんせゝが連れてつてもーだから少しくらい大丈夫や。」

「そうそう、学祭近いからちょっとしたリハーサルよ。」

「そうそう、健全な女子中学生達の必死で選んだ物なんだから！」

・・・それで何故『ドキッ 女の子だらけのコスプレ写真館』なんて言う選択肢になるんだ？よーするに好きなコスプレして写真とつて終わりだろ？

「ほらほら、ここから好きな子とその子に着せたいコスプレ選んで！あゝ、名前解んなかったらテキトーで良いよ。二人位選んじやつて。」

ふむ、そう言うことか。

最近原作知識薄れてきてるから名前は覚えてても顔が解らない。エヴァはやめとこつ。



「……ん？那波、って人誰だっけ？ま、この人で。

む、後は……。龍宮？あ、狙撃手さんか！あの時遠くてよく見えなかったからこの人で良いや。

服……。服ねえ。ぶっちゃけ言うと服の名前も殆ど覚えていない。

スク水？ブルマ？メイド服？バニー？猫耳？何の呪文だこれは……

……

で、でもこのクラスの事だ。変な服が混ざっていてもあまり不思議じゃあない！

さてどうする！？

ここで断るという選択肢が出ないというのが流石ですなあ？

……。む？なんか聞こえた気がする。

「どうすんの？」

「う、じゃ、この人とこの人、これとこれ」

「……。へえ、無音さんホントに知らないで選んでるの？

つか服装もマニアックだわー。」

初日にインタビューしてくれとせがんで来ていた子が何か言っている。

????マニアックってなんて意味だっけ????

「あ、ホントに解ってないのねえ。っていうかホントに年上？なんか小さい子相手にしてるみたいなんだけど……」

今度はメガネの子……。この子は男にとって敵な気がするぞ！



「俺、レイ、探し、行く。」

「当日も来てね？」

是非ともお断りさせていただこう！

と、世界樹でエヴァとの待ち合わせか。つーかアイツは準備しないのか？

「まあ良い。走る。」

この日、世界樹の方向へと向かう道路で車をやすやすと抜かしていく少年が目撃されたと言う。

sideエヴァ

「ほう、ちゃんと来たか。」

「用、さつさと済ませる。俺、レイ、探す。」

「ふふん、レイとはこいつの事か？」

「ピャウ！！！」

私は得意げに茶々丸のほうを指差す。

たく、あのチビ助め。無駄に強いから手間取ってしまった。

タカミチはアツサリ不意打ちでどうにかなったがな！

「さあ、コイツを返して欲しければ私が本気で戦える場所で勝負してもらおうか！」

「……悪党」

「ふ、何とでも言うさ」「ロリ、ペチャパイ、カベ、チビ」貴様あ！  
！喧嘩売ってんのか！？」

「売ってきてるの、そっち。」

むぐつ！確かに、ふ、ふん！まあこいつを軽く負かせば住む事だ！！

「さあ来て貰おうか。我が別荘に！」

フハハハハ！久しぶりに本気を出してやる！

Side  
無音

いづれにいづれにひたすらいづれに。

まあ、そんなこんなでエヴァの別荘の海岸に居る。

「レイ、返す。」

「ふん、私に勝つたなら考えてやらんでもないだろう！  
 リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『氷神の戦槌』……！！」

俺に氷玉が効くとも思ってたのか！

「超チヨ〜〜〜〜ツプ!!!!!!」

バシャアアアアアアアアアン!!!!!!

「気も魔力も使っていないのにこの破壊力か！？くっ！茶々丸！  
リク・ラク……」

む、来た。

「お相手していただきます。」

鋭い突きが顔に迫る、それを俺は勢いを殺さず掴み投げる！！

「ケケケ、ヤルジャネエカ。」

「む！？」

チャチャゼロさぁん！？何でいんのかなぁ！？  
俺は思いつきりしゃがみ、殴り飛ばす。

「フツ！完全詠唱だ、効くぞ？『凍てつく氷棺』！！！！」

！？下からの威圧感が半端ない！

「羽よ！」

バサア！！

パキヤアアアアン！！

「む？」

あ、アブネツ！？何じゃそりゃ！ギリッギリだ「よそ見してて良いのか？」・・・ぞ

「オオオオオオオオオオ！？」



「避け、られた。」

「ハア、ハア、ハア、くつな、なんだそれは！？広域殲滅魔法にも劣らない破壊力だぞ！

ゲートを開くのが遅かったらチリも残らんだろう！手加減と言うモンを知らんのか！？」

「ん？」

俺は技を出した方向を向く。

俺のチョット先から地面は抉れ。

海も道ができている・・・あ、今なくなった。

「説明、いる？」

「いるに決まっている！！！！！！」

決まっているんだ・・・

じゃあ、じゃ、説明タイム！

まず、俺の方に埋め込まれている天使の力と悪魔の力。

魔法のような具体的な物ではないが、人間が持つにはあまりに大きい力だ。

つまり、車のガソリン然り、魔法の魔力然り、これにも当然何らかの代償で力が働いているのだろうと考えた訳だ。

そして修行で解るようになった、気、魔力、この二つが暴れた後と前とは量が違っていたのだ。

つまりは、この石は天使のほうに魔力、悪魔の方が気を食べて、何らかのエネルギーに変換している。と言う事だ。

そこで、無理やり必要以上の量を流し込んだらどうなる？

そう思つて試行錯誤しやつてみたらあら不思議。  
回復力は上がるし、破壊力も凄い事になった。  
まあ、こんな感じで……

「解つた？」

「……片言で解りにくかったが要点は捕らえた。」

へ？片言じゃなかったじゃんって？言葉と思いは……いつでも違うものなのさ……

はい、すいません。ちょーし乗りました。かつこつけました。

「しかし、お前、その石はまさか……だから包帯を巻かれていて、しかも捨てられたと言つのか……」

あれ？俺の嫌いなシリアスムードの予兆が？

へ？なぜ？なぜ？

「お前の世話は私がしてやる！困った事があればここに来るが良い……」

ナンデダアアアアアアアアアアアアアアアア！？

俺は訳の分からないまま家路に着くのであった。

sideエヴァ

くそつ、胸糞悪い！

まさか凄い力を持った面白い奴が来たと思つたら、変な石による力だった。

大方魔法世界の組織が仕組み成功ではなかったたので捨て去つたのだ



ろう。

それが、私のように殺してきたか……言葉が達者でないのも下手したら私より酷い境遇なのかも知れんな。

「……ふん。」

「ケケケ、ゴ主人ガヘタレ顔ニナツテヤガル。丸クナツタモンダナ。」

「マスター、悲しそうです……」

「む、うるさいぞ貴様等！ええい！チャチャゼロ逃げるな！！茶々丸もネジ巻いてやるぞ！？」

意外と優しいエヴァンジェリンさんでした。

## 不幸人の試験。

side 無音

今日はなんか知らないけど世界樹前に呼び出された。

「ふおおおお、来たか無音君。」

ここに来た日に攻撃してきた生徒達が居る。大方魔法関係者なのだろう。

「用事、なに？レイ、居ない。」

そう、あの後タカミチを探しても居なかったのだ！

まったく、あのデスメガネ何処に行つてやがるんだ……。あ、居た！

「ああ、レイ君だったらここだよ？」

「ピャウー！」

「さて、知っている者たちも居ると思うが、滝音 無音君じゃ。」

高畑くんが出張の時に連れてきた孤児じゃ。これからはここ、麻帆良学園で引き取る事になった。ここに来る前は魔獣がすむ森で生活していたので戦闘に関しては問題はない。

そう言う訳で夜間警備の一端、及び広域指導委員の役割をもらう事になった。」

おお、ざわついてるねえ。つーか俺は夜間警備の了承は出してないんだが？

終いにやその無駄になげえどたまかち割って喰らうぞ？

「まあ、力量を見てもらうためにも高畑君と戦ってもらおうか。」

え、デスメガネさんと戦うデスか？めんどくせえです。

「おい、無音。『アレ』は使っなよ？」

む、念話？

「む、了解。」

「そういえば、どれくらい強いかわらなかつたなあ。」

うっは、ヤル気満々ですよあの人。

「行く」

「よし、いいよ！」

集中、しろ。

相手の攻撃パターンは知ってる。

俺は大きく一步を踏み出す。

それを迎撃するかのように来る空気の塊。  
なるほど、これは痛そうだ。

5個、前から不自然な空気の流れがこちらに来ている。  
それに合わせて自分も拳を振り切る。

パパパパパン！！！！

「ほお」

「参天闘立」

「むぐっ！？があっ！！」

・・・気絶しない、凄いなあ。

俺はそのまま力任せに吹き飛ばす。

「くっ！？凄い力だね。気も魔力もまったく使っていないし。」

「生まれつき」

「それはそれで怖いよッ！！」

さっきより沢山撃ってきた。数が把握できない。

だが、俺は素手だけじゃあない事をアッチは知らない。

シュルルルルル！！

包帯が伸び俺の前に壁を作る。

「それだと上がから空きた。」

た、タカミチがとんだあ！？

ダガガガガガガガ！！

「ぐ、むう！？」

マシンガン見たいに撃ってきやがって。

さて、俺に今足りないのは？

連射できる遠距離攻撃、もしくはこの連撃を一気に払いのけられる  
範囲攻撃。

その答えは？

バサア！！

「っ！いやあ、最初に会ったときに遠目で見たけど。これはまた綺麗な翼じゃないか。」

一対だけ翼を出す。

右の翼で攻撃を払いのけ。

一気に二つの羽を広げ上昇する。

オチババネ  
「於血刃羽」

羽が凶器のようにタカミチに向かって行く。

「く！？」

ドッガアアアアアアアアアアアアアアアア！！

砂埃で見えなくなった。

トオモイキヤ

ドオコオオオオオオオオオオオ！

オレハフキトバサレテイタ

sideタカミチ

くつ、最後の攻撃は凄かったな。いや、その前の攻撃も凄かったんだが。

最後の最後に本気を出してしまった。

「はあ、はあ、大丈夫かい?!無音く……………」

「…………ウロボロス」

彼は何かを呟いた。

その時、彼から使っていないが辛うじて感じられていた『気と魔力の力が完全に消えた』

「っ!?!く、理性が飛んだか!!おい、タカミチ一旦本気で沈めろ!!ここら辺一体更地になるぞ!!おい、じじい!ぼさつとしていないで止める準備をしろ!結界を張るなりアイツに攻撃を加えろなり出切る事をやれ!」

彼の背中に翼が増えた。

それが周りの狙撃や魔法を弾いている。

「足りない、速さ?力?いや、手数。技が少ない。なら作る。何処までも追い、戦える力を」

彼の肩の部分が光る。

「豪殺・居合い拳!!!!」

しかし彼は止まらない。

「どんなに追い求めても力が足りないのなら。」

「くっそ！」

エヴァが焦りながら無音君に攻撃する。  
しかし効いていない

「何処までも上り詰めよう。」

「そこに力の答えが有るのなら。」

これは、詠唱なのか？

「立ち昇れ翡翠泉、落ちろ水晶星、切り裂け緑柱石刃」

彼から出される光が広がるうとしている。

「照らせ紅玉、鎮めよ蒼玉」

「させないよ！！豪殺・居合い拳！！」

「くっ！？」

光が消える。コントロールを失ったみたいだ。

「雷光剣！！！！！！」

「むっ!!」

「雷の暴風!!」

「ぐうつ!!!!????」

周りから攻撃が加えられる。

「うつうあああああ!!!!」

「終了だよ。」

パン!

・・・撃った?

「た、龍宮君!」

「ただの麻酔弾だ。心配しなくても大丈夫さ。それに、せっかく面白そうな人が来たんだ。みすみすそれを逃したりはしないさ。あっちもそうみたいだからね。」

彼女が指をさす方向を見ると・・・

「まったく、お前はちょっと強い攻撃が当たったくらいでなんだ! 後で家に来い、鍛えなおしてやるぞ!!」

「う、森居たら、攻撃されると、手加減できなくなった。仕方ない。」



「そんな言い訳通ると思ってるのかぁ！！！！！」

「ピャウー！！」

「…………レイまで、怒った。」

はははは、ああして見るとやっぱりまだ子供だなあ。

「ふおっふおっふお、まあ今回はトラブルがあったが実力の程は解ったじやろ。それでは今日のところは解散じゃ！」

ちなみに…………

「無音君。さっきの技って発動していたら威力どれくらいになっていたんだい？」

「……………たぶん皆死んでた？」

「んなもん無意識のうちに出すな！！！」

「ガフツ！？」

止められてよかった。

本当によかった！

そうつ心から思い冷や汗をかくのであった。

side 無音

翌日夜

「無音さん！そっちに行きました！」

桜咲が叫ぶ。

「超チョップ！！！」

ズバン！！

『なんなんやあの兄ちゃん！チョップでスパスパ斬ってくるで！？』

そんな事を言っている奴も龍宮の狙撃で還される。

「………終わり？」

「はい、さっきのでここの地区の討伐が完了しました。」

『ふふふ、意外と楽だったな。』

……討伐、か。

モンハンがやりたくなって来た。今度のお給料で買おう。

『ふむ、私も買おうかな？』

……サイコメトラー！？

『ふふふ、そんなじゃないさ。』

「侮れない。」

「…………あの、何の話をしてるんですか？」

「…………ん？察しろ」

「はあ？」

「…………む？この気配は……………」

「さき、帰って良い。」

「はい、ではお疲れ様です。」

『じゃあお暇させてもらうよ。』

「…………行っただか？」

さてと

「この間の技、ちゃんと最後まで発動したい。出て来い。」

「おや、気がつかれていましたか。」

上位の悪魔かな？

「どんなに追い求めても力が足りないのなら。」

「何処までも上り詰めよう。」

「そこに光があり、闇があるなら、それはある。」

「力の答えは見えるはずだろう。」

「何をするつもりかは知りませんが止めさせていただきましょう！  
」

殴りかかってくる悪魔。

「立ち上れ翡翠泉、落ちろ水晶星、切り裂け緑柱石刃」

でも俺のほうが早い。

「照らせ紅玉、鎮めよ蒼玉  
終わりだ。」

ホウギョクシンカ  
「宝玉神歌」

・ ・ ・ ・ ・

翌日、一晚にして森から木が半径1キロメートル単位で消えていたのがニュースになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9447p/>

---

不幸で不幸な不幸人

2011年1月30日19時45分発行